

下町

林 芙美子

内容理解

この文章で筆者は、シベリア抑留の夫を待つ「りよ」と復員兵「鶴石」という、下町に生きる二人の、切ない恋模様を描こうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

◇出会い

冷たい風の吹く中、ぱちぱち火の弾はぜている小屋、顔を出した¹ 風の男が、人柄のいい人物に思えて、お茶を ² するりよは声をかける。

「その腰掛へかけなよ」（炎の向こうのりよは、色白い器量のいい女であった。）

「さア、その腰掛へかけて、ゆっくり弁当をつかったらどうだね……」

二人は、それぞれの弁当を開け、りよは、商売物の茶を出してやかんに入れる。

「高いものをいいのかね」（にこつと笑った、大きい咬くちい歯が若々しい。）

男は、焼いた鮭を半分手でむしって、りよの飯の上に差し出した。

「主人はシベリアにいるんですけど、まだ、戻って来ませんので、こんな事でもしなくちや食べてゆけないンですわ」

（りよは、自分の周囲にだけ³ ⁴ 気分が残っているように思えた。シベリアで四度も冬を迎える夫隆次のおもかげが、 のように痩せ細って考えられてくる。）

「自分もシベリアからの引き揚げでね」

（平凡な男のように感じられるだけに、気安く話ができ、 ⁵ がよかった。）

「このあたりに来たら寄っていきなさい」「そりやア、寄らせていただきますすとも」

（男は茶を買い、寝床を見せる。壁に山田五十鈴いすずのエハガキがとめてあった。）

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

人柄（二二四・上12）

恐縮（二二六・上6）

音信（二二六・上19）

始末（二二七・下5）

(その日から、この男、鶴石芳雄の小屋に寄るようになり、息子留吉を連れていくと可愛がってくれる。細君があるのかしら、鶴石ののんびりした⁶ を知って、自分の感情が、少しずつ⁷ な風に変わつてきているようにも感じられた。)

◇浅草見物 (おめかしをして若く見えるりよ、古ぼけた⁸ の鶴石、鶴石に抱き上げられた留吉の三人は、浅草を見物に行き、途中で、雨に降られてしまう。映画を見て、宿屋にとまる。りよは布団を見て、胸さわぎがして、良人^{おと}に済まない気がする。)

「おりよさん、そっちに行ってもいいかい?」「いけないわ……」

(鶴石は、兵隊から戻ったら、妻が別の男と暮らしていたことを語る。)

「駄目かあ……」「いけないわ……私⁹ のことを考えるのよ」

(布団の上で頭^{うき}を垂れる鶴石の熱い首を、りよは抱いてやった。)

◇別れ 二日後、為吉と鶴石を訪ね、鶴石がトラックで橋の上から落ち死んだことを教えられる。黒板の「二時まで待った」の書き置きに涙があふれる。涙が噴いて眼が痛くなるほど泣いた。二度とああした男にめぐりあう事はあるまいと思う。りよは、商売があつてもなくても、のたれ死にしても¹⁰ がいいと思った。声をかけた貧しげな家で、「ちよつて待つて、いま空^{あきかん}罐探してみるから」と言われる。二、三人の女がせつせと足袋底を縫っている。時々針が光った。

主題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。

〈着目点…ひかれ合う二人の境遇〉

発展

- 次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。
- ・行商とは、どのような職業か。
 - ・シベリア抑留とは、どのような出来事か。
 - ・戦後の東京は、どのように復興していったのか。

100